

露ワイン再び活況

「ウォッカより健康的」

プーチン政権補助増額

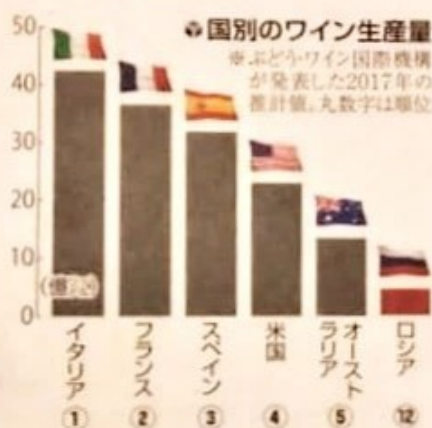
ウォッカが国民酒として定着しているロシアで、ワイン業界が活気づいている。ワイン用ブドウの栽培面積は過去3年で3割以上増えた。ウォッカよりもアルコール度数が低いワインの生産は、国民の健康増進を図るプーチン政権も奨励しており、ワインの本場である欧州との関係悪化が自前のワイン増産を促している面もある。(ロシア南部クラスノダール地方 工藤武人、写真も)



ポルドーと同緯度

黒海に面した港灣都市ノボロシスク近郊の丘陵地帯には、海を見下ろすようにブドウ畑が広がる。ここで2015年に開業したワイナリー「シャトー・ピノ」では、約1000畝の敷地でワイン用のブドウを栽培し、年間約35万本を醸造する。マクシム・ポルホビティン営業部長(40)は「将来は100万本態勢にしたい」と意気込む。敷地の一角では20年の稼働開始を目指し、ワイン醸造施設の建設工事が進んでいる。

ロシア南部アナバの収穫が終わったブドウ畑で、ワイナリーについて話すルノー・ビュルニエさん(10月19日)



ビュルニエさんのワイナリーで醸造されたワイン

● ロシア南部は欧州の有名なワイン産地とほぼ同じ緯度にある



ロシア クラスノダール地方
トスカナ州(イタリア)
ポルドー(フランス)

を展開したため、ワイン畑は荒廃し、ワイン産業は壊滅的な打撃を受けた。保養地アナバで01年からロシア人とワイナリーを営むルノー・ビュルニエさん(62)は、ワイン産地としての潜在能力に魅力を感じてスイスから移住した。畑の土壌整備や醸造設備の準備など文字通りゼロから始めたこと振り返る。現在は、白ワインのシャルドネや赤のカベルネ・ソービニオンなど年間約18万本を醸造し、主にスイスに輸出する。クラスノダール地方だけでなく、20以上のワイナリーがある。

た。19年は約30億(約51億円)に倍増させるといっ

● 欧州と関係悪化
ロシアが14年にウクライナ南部クリミアを併合したことで欧州が発動した対露制裁に対抗し、ロシアは欧州からチーズや果物などの輸入を禁止した。ワイン自体は禁輸対象ではないが、多くの食料品を輸入している欧州との関係悪化を受けて、農産物の自給率向上を図る国策がワイン業界への追い風になっている。

極寒の地というイメージが強いロシアだが、ノボロシスクを含むクラスノダール地方は温暖な気候が特徴だ。世界有数のワイン産地、フランスのポルドーやイタリアのトスカナ州と緯度はほぼ同じで、ソ連時代からワインの一大産地だった。

もともと旧ソ連はワイン生産が盛んで、ワインが特産のジョージア(ソ連崩壊後に独立)出身の独裁者スターリンは、国民が誰でも飲める安価で甘みの強いワイン生産を奨励したが、1985年に誕生したゴルバチョフ政権が、徹底した反アルコール・キャンペーン

プーチン政権による支援策もワイン業界を勢いづけている。露農業省によると、ワイン用ブドウの栽培などに対する国の補助金は18年に約14億(約24億円)と、過去3年で5倍以上に増える可能性がある。

ぶどう・ワイン国際機構(OIV、本部・パリ)によると、ロシア国内のワイン用ブドウの栽培面積は14年に8万5000(推計値)と、14年から約35%増えた。しかし国別ワイナリー生産量では世界12位にとどまっており、今後さらに伸びる可能性がある。

インドネシア
● ジャカルタ一言剛志
乗客乗員189人が搭乗していたインドネシアの格安航空会社(LCC)ライオン・エアの旅客機が10月に墜落した事故で、インドネシアの運輸安全委員会は28日、中間報告「事故原因まだ不明」

行制に問題がある」とも信じており、ほかの計器類にも不具合があった可能性もある。

事故前日の運航でも失速警報が作動し続け、自動操縦で機首が下がるなどの異常が生じていた。機長席副操縦士席で高度や速度

た